

# 九州高等学校地理教育研究会第19回研究大会「長崎大会」参加報告

地歴公民科 渡辺 卓郎

## 大会日程

【第1日目】 7月27日(水)(会場:セントヒル長崎)

受付 10:00~10:30

(1) 開会行事 10:30~10:50 司会:田尻 勝彦(西陵高等学校)

- ① 開会の言葉 望月 聡(猶興館高等学校)
- ② 歓迎の挨拶 宮内 博巳(長崎北高等学校長)
- ③ 来賓挨拶 立木 貴文(教育委員会 高校教育課参事)

(2) 研究発表 11:00~15:00(昼食45分を含む) 司会:田尻 勝彦

- ① 「長崎県における樹木の分布特性とその植生形態による地域性の形成」  
長崎県立佐世保中央高等学校 山村 正明
  - ② 「ICTを活用した授業研究」 佐賀県立唐津西高等学校 山口 崇
  - ③ 「沖縄の観光産業」 沖縄県立向陽高等学校 長島 誠
  - ④ 「地域を生かした授業教材づくり」 大分県立三重総合高等学校 菅原 健
  - ⑤ 「Sky peを使った国際交流と授業への導入例」  
宮崎県立福島高等学校 小山 貴弘
  - ⑥ 「ニュージーランド巡検報告〜地理オリンピック・マルチメディア風」  
ラ・サール高等学校 浅井 俊昭
  - ⑦ 「世界ジオパーク認定&阿蘇の噴火」 熊本県立苓明・天草拓心高等学校 片山 彰
- (3) 講演1 15:10~16:40  
「世界遺産観光と地理教育, 観光教育ー長崎の事例からー」  
長崎大学環境科学部人間社会環境学系 准教授 深見 聡先生
- (4) 質疑応答
- (5) 閉会・諸連絡 16:40~

## 1日目のまとめ

鹿児島県からの参加者は8人(志学館:矢野, ラ・サール:浅井・西村, 大口:坂元, 鹿屋:渡辺, 鹿児島水産:徳留, 鶴丸:奥村, 川内:神宮)であった。大会の全参加者は約80人弱であった。特に熊本県からは7人の参加があったが、地震の影響で自己負担での参加などかなり苦労しての参加であった。

各県代表の発表は、授業実践が多かった。特に佐賀県では各教室に電子黒板が常備され、生徒も学習用PCを入学時に購入していた。そのような環境の中で地理の授業では、資料提示や地域学習のまとめを電子黒板で行うなど普通の授業で活用されていた。今後の学校現場の将来像を見るようであった。

また講演1の深見准教授は鹿児島出身で、鹿児島大学大学院時代からNPOを立ち上げて地域興しを実践されてきた。その経験と研究成果から、「持続可能な観光」を今後は目指すべきで、そのためには「良き観光者」を育成する地理教育のあり方が重要であると述べていた。

【第2日目】 7月28日(木) 地域調査Ⅰ 池島, 外海(そとめ)

日 程	8:00	長崎駅前集合
	8:10	長崎駅前発 瀬戸港へ
	10:15	瀬戸港着, フェリーで池島へ
	10:50	池島着, 昼食後, バスで島内見学, 池島炭鉱見学
	15:50	池島発(高速フェリーで神浦港へ)
	16:15	外海・出津(しつ)文化村見学
	17:20	外海・出津発

1 池島について

池島や松島がある西彼杵(ニソノキ)半島は, 長崎市南部の野母半島ともに, 古い岩石からなり, 古生代の海底に厚く積み重なった細層物が中生代に起こった造山運動によって結晶片岩に変化した。西彼杵半島は隆起準平原であり, 幼年期から壮年期にあたるV字谷が刻まれている。

池島周辺には良質な石炭鉱脈があり, 松島炭鉱が1959(昭和34)年に営業出炭をはじめた。鉱区3万5500ha, 坑道延長は96km, 最盛期の1985(昭和60)年には153万tを出炭。

42年間の総出炭量は4400万tに及ぶ。いち早く機械化をすすめ, 「国内で最後まで残る優良鉱」であり, 太平洋炭礦(北海道釧路市)と最後まで出炭を続けたが, 2001(平成13)年に閉山した。

翌年からは, 国の「炭鉱技術移転五カ年計画」をうけ, アジア諸国研修生に技術を教える研修施設として利用された。8年間研修施設として利用されたあとは「池島炭鉱さるく」として元炭鉱マンガイドによる坑内見学と島内観光が行われている。現在島内の人口は169人であるが, 炭鉱の最盛期の1970(昭和45)年には7776人がいた。

炭鉱で働く人たちは, 24時間勤務であり, 高層アパートで暮らしていた。住民の多くは風呂がなかったので共同浴場を利用(現在でも)していた。また高層アパートの一室は, 家具や食器等がお



廃墟となった高層アパート (NHKプラタモリでも紹介)



坑道内は湿度が高く, トロッコのほかケーブル等が多数設置

かれ当時の様子が再現されていたが、2LDKで水洗トイレがあるなど当時としては近代的な作りであった。

炭鉱見学は、かつての研修施設を利用したもので、ヘルメット・ヘッドライト着用で入坑した。かつて使用された機械なども動かしながら説明を受けた。しかし海面下にある坑道については、現在閉鎖され水没していた。

## 2 外海・出津について

外海は西彼杵半島の西側に位置し、江戸時代統治した大村藩の監視が届きにくい場所であった。そのため禁教下においてもキリスト教信仰が組織的に継承されてきた。外海からは五島列島などの開拓移住がおこなわれた。1873(明治6)年のキリスト教解禁後、ド・ロ神父の指導のもと、1882(明治15)年出津教会堂が建てられた。また神父は慈善事業にも力を入れ出津救助院を創設した。神父は1879(明治12)年に外海地区の主任司祭として赴任した。布教活動の傍ら開墾や私財をなげうって井戸など掘った。また出津教会は、国の重要文化財に指定され、長崎の教会群が世界遺産に登録されると、この教会もリストに入っている。



出津教会，周辺は険しい丘陵地帯

## 2 日目のまとめ

池島は日本で最後まで採炭されていた場所であったので一番行きたい場所であった。島内はバスで案内されたが、閉山後時間がたち、さまざまなものが老朽化し立ち入り禁止にもなっていた。フェリー乗り場近くの県営アパートも空き家が多く、閉鎖されている棟もあった。解体にも費用がかかり、放置されているのが実情だそうだ。

島内中央部の廃墟となったアパート群を見るまでは、狭い島内に8千人近い人がいたとはとても信じられなかった。かつては映画館・ボーリング場などもあり、風呂用の配管も至る所で見ることができた。

出津では、現地ガイドからド・ロ神父がきた後も、必ずしもすべての人がキリスト教に復帰したわけではなく、在来習慣として続けていたり、さまざまな信仰のあり方が残っていること知ることができた。

【第3日目】 7月29日(金) 地域調査Ⅱ グラバー園，野母崎

日 程 8:00 長崎グラバー園見学

9:10 講演2「旧グラバー住宅～世界遺産登録の経緯」

長崎総合科学大学 環境・建築学部人間環境学科教授

グラバー園名誉園長 ブライアン＝バクガフニ

- 1 1 : 0 0 グラバー園発 軍艦島(車中ガイド)
- 1 2 : 0 0 アレガ軍艦島
- 1 3 : 0 0 講話 「野母崎の豊かな自然・文化, ~地域にうもれている魅力~」  
長崎市地域おこし協力隊野母崎地区担当 山本 春菜さん
- 1 4 : 0 0 アレガ軍艦島発
- 1 5 : 0 0 長崎駅着

### 1 長崎グラバー園

日本の開国と同時期に長崎に暮らしたイギリス商人たちの暮らしをうかがい知ることができるのが、長崎港を見下ろす南山手地区のグラバー園である。1974(昭和 49)年の開園以来、明治期の日本の近代化の象徴している。園内の旧グラバー住宅、旧リンガー住宅及びオルト住宅は建築当時のままの位置に立ち、日本における初期の洋風建築と欧米人居住者の生活、業績を伝え国指定重要文化財になっている。



旧オルト住宅(1865年建築) 日本最古の石造り住宅とも

### 2 講演 「旧グラバー住宅~世界遺産登録の経緯」について

講演者のバクガフニさんは、カナダ出身で来日して 40 年以上とのことで流暢な日本語であった。グラバーの業績を研究する中で、グラバー園が世界遺産登録に登録されるまでの裏話なども聞くことができた。グラバーに関してはグラバー商会自体は、9 年ほどしか活動しなかったが、彼の息子が倉場富三郎として長く長崎経済界に影響を与え、グラバー邸自体も住居として使われていたが、対岸の戦艦武蔵建造中の三菱造船所を望めたので、機密保持という名目で、第 2 次大戦前に三菱に譲渡されたことを知った。

また軍艦島の調査もかなり早くから始めており、人がいなくなるとすぐ廃墟になっていく過程も資料で見ることができた。グラバー園の抱える問題としては、あまりにも観光面に特化して展示がなされ、グラバー邸が住居兼事務所と表記されるなど歴史的事実とかけ離れている。今後はそれらを改善していく必要があった。とくに世界遺産は指定された以降の活動が大切で、保存と研究を進め遺産を守っていく必要があった。

### 3 端島(軍艦島)

今回は軍艦島は、対岸の野母半島から見ただけであったが、その独特の景観を間近で見

ることができた。半島から 5 km 沖合にあり、1890(明治 23)年から本格的な採炭がはじまり、坑内から排出されたボタ(捨て石)で周囲を埋め立て、南北 480 m、東西約 160 m の島になった。

石炭採掘の最盛期には年間約 41 万 t を出炭し、1960(昭和 35)年には人口 5267 人であった。狭い島で大人数を収容するため 10 階建て高層建築が多数建てられた。

しかし 1974(昭和 49)年に閉山され、島は三菱マテリアルが所有していたが、2001(平成 13)年に高島町(現長崎市)に無償譲渡された。2009(平成 21)年から一部が見学できるようになり、韓国のなどの反対があったが 2016(平成 27)年に世界遺産に登録された。



端島(軍艦島) 島内は南部の整備された見学路だけ公開される

### 3 講話「野母崎の豊かな自然・文化、～地域にうもれている魅力～」

地域おこし協力隊として活動中の話を聞くことができた。山本さんは 1 年間の任期で地域に住んで、野母崎魅力を得意のイラストや情報機器などを使って発信していた。海に囲まれた野母崎は四つの地区がありそれぞれ、特色があり、祭りの性格もかなり違いが見られた。しかしいずれの地区でも外来者に対して寛容であり、暖かい地域社会であった。その地域の魅力は、外部の視点(よそもの)で発見できるので、その魅力を Web、フェイブック、イラストなどで発信していた。

まとめにかえて

大会テーマは「地域遺産と地理教育」であり、地域調査のテーマは「石炭からはじまった産業革命」であった。講演や地域調査に参加して初めて、長崎県の独特の歴史と近代化の背景に、長崎周辺にあった石炭が重要な役割を果たしていたことが体験できた。

地理教育研究会は 2 年に 1 度、九州大会を開いている。福岡県以外の県がローテーションでまわっており、県外の大会には 3 回目の参加で貴重な体験ができた。各県とも教育現場が抱える悩みは共通しており、他県の先生方とも交流できて良かった。

また講演者 2 人ともが共通して、郷土愛をもち地域を知ることが、観光には大事であり、そのためには教育の果たす役割が大きいことも強調していた。幸い鹿屋高校には 1 年生で野外実習があり、40 年以上続いている。この行事以外でも日頃の授業の中で、地域の魅力をつたえ、地域を愛せる人材を育てることが、今後の課題であると実感できた。